

Title	『阪大日本語研究』7号 1995.3 要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 7 P.107-P.110
Issue Date	1995-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6637
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

多言語社会への対応—大阪：1994年—

宮島達夫

キーワード：多言語社会、大阪、1994年

現在、日本は外国人がふえて、日本語だけではすまない社会になってきたが、この状況に各方面の関係者がどう対応しているか、ということ、1994年の大阪について調査したものである。府庁・市役所・鉄道・デパート・博物館・ホテルなどが、それぞれ英語・中国語をはじめ、おおくの外国語による広報・宣伝の活動をしていることがわかった。

シテ節の「ハ」による取り立て

仁田義雄

キーワード：「ハ」による取り立て、シテハ、ナガラハ、ノデハ、カラハ

本稿は、シテ節を中心に、従属節が「ハ」によって取り立てられる場合のあり方を考察したものである。シテ節は、種々の意味・用法を持つが、「ハ」による取り立てを許すのは、基本的に時間的継起と起因的継起の場合であり、並列を表す場合は、「ハ」を後接させることができない。付帯状況を表すシテ節は、主節の述語が否定形を取ることによって、「ハ」による取り立てを可能にする。ナガラ節に対する「ハ」の取り立ても、付帯状況を表すシテ節と同様である。従来の通説とは違って、カラ節もノデ節も、「ハ」による取り立ては可能である。「ハ」による取り立てによって、ノデ節が仮定事態化し、カラ節では、文全体して非既定事態化する。

条件接続形式による評価的複合表現

—スルトイイ、スレバイイ、シタライイ—

高 梨 信 乃

キーワード：条件接続形式，評価的複合表現，事態の制御可能性，当為判断，願望

本稿では、いわゆる条件接続形式から形成された評価的な複合表現のうち、スルトイイ、スレバイイ、シタライイを採りあげた。

これら三形式が文において担う意味を整理・記述するとともに、互いの異同を明らかにし、それを構成要素であるト、パ、タラの性質と関連づけることを試みた。考察の結果は下の通りである。

(1) スルトイイ、スレバイイ、シタライイの意味は、当該事態の制御可能性によって大きく<当為判断>と<願望>に分けられる。

<当為判断>からは条件によって<勧め><放任><不満><後悔>といった意味が派生する。

(2) 三形式の本質は次の様なものである。

スルトイイ

→当該事態を望ましいものとして肯定評価する。

スレバイイ・シタライイ

→特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる。

(3) 上の本質の違いから、スルトイイとスレバイイ・シタライイの用法には、<勧め>の場合のニュアンスの違い、<不満>や<後悔>にはスルトイイは不適であるなどの差異が生じる。<単純な願望>の場合は、両者の違いがほぼ中和される。

関西圏における接客敬語行動

—店舗形態によるバラエティ〈その1〉—

真田 信治

井上文子

キーワード：言語行動，接客用語，「でございます」，音声変異形

店舗形態による接客言語行動のバラエティの様相を、関西圏の百貨店、スーパーマーケット、個人商店をターゲットとして探った。たとえば、敬語形式の「でございます」の使用率は百貨店では9.0%、スーパーマーケットでは3.8%、個人商店では0.0%であった。百貨店などの接客マニュアルでは、この「でございます」の運用が好ましいことばづかいとして指導されているが、これが現場での実態なのである。ただし、百貨店における電話での対応では、「でございます」の使用率が64.9%にアップする。なお、各百貨店ごとの「でございます」の出現率の順位は、イメージとしての百貨店ランキングとほぼ対応している。スーパーマーケットの場合、「でございます」は特定の系列の店舗のみに出現していて、他店では皆無であった。ここでも接客マナーの指示の徹底度に、店舗による相違が明らかに存在していることが確認された。

日本語教育と言語管理

J. V. ネウストプニー

キーワード：日本語教育，言語政策，言語計画，言語管理

日本語教育は「言語管理」(language management)の一つのシステムであるが、言語管理の他のシステムと共有する特徴の中に次のものがあると認められる。

(1) 広い意味での言語問題への解答である、(2) 問題を部分的に解決するとはいえ、完全には解決できない、(3) 「言語」よりも、「コミュニケーション」や「インターアクション」のフレームワークを使う、(4) 国家レベルから談話レベルまでの問題をカバーする、(5) 「管理過程」というプロセスを通過する、(6) 近代前期、近代とポスト近代のパラダイムを持っている。しかし、ここで討議できなかった他の共通の特徴もある。

日本語のリズムに関わる基礎的考察とその応用

土 岐 哲

キーワード：話しことば，リズム，音数律，音韻論的音節，音声学の音節，音節構造，
音節主音，二連音節，長音節，短音節，拡大長音節

日本語のリズムには、「お、は、よ、う、ご、ざ、い、ま、す」という言い方と「おは、よう、ご、ざい、ます」という言い方が考えられる。ここでは、後者がより現実的な発音であるとの立場から、全国各地で行った実験結果等を踏まえつつ、基礎的理論とその応用法を考察し、次のような知見が得られた。

- 1：同一リズムの及ぶ範囲は、いわゆる文節もしくは一氣に発せられた連文節に該当する。
- 2：1の範囲内部でのリズムの区切りは、おおむね音節の構造によって決定されるが、強力な語構成成分が意識された場合には、語構成も介入する。
- 3：二短音節分ひとまとめがリズムの基本であるが、長音節としてのまとまりの方が優先される。
- 4：いわゆる「特殊音節」が重なって現れる「拡大長音節」では、「特殊音節」該当部分が楽音ならば、孤立したり、後続の短音節と接合することもあり得る。

動詞オクの意味の抽象化過程

由 井 紀 久 子

キーワード：オク，～テオク，意味の抽象化，類像性

本稿では言語による世界認識の傾向を探ることを目的とし、本動詞、複合動詞、補助動詞用法で使われる動詞オクの意味を統合的に扱い、その内蔵される意味構造を示した。本動詞オクでは対象の空間移動と状態保持の意味があるがその2つの意味論的関係性を、具象空間から時間軸への抽象化という説明で行ない、関連性を示した。また、複合動詞や補助動詞における抽象化した意味も、具象空間移動の意味成分から抽象的な成分へと転換することと意味成分が一部欠落することで説明をし、全体的な関連性を示した。